

第三章 潮風の向い

なをの死から八日後、木更津で大規模な「米騒動」が起こった。

昨年末以来、総三郎の周旋で小康状態を保っていたかにみえたが、一部の米穀商が在米を他地方へ転売することで投機的な儲けを得ようと目論み、密かに船積みしていたのを住民に察知された。これが大規模な打ちこわしの発端となった。

木更津船の乗り子や港湾人足は日銭を稼いで飯米を購入していたから、米価が急騰すれば生活が破綻する。それでもあらゆる物資が軒並み高騰しており、天井知らずの物価高を抑制するための施策を幕府が何も打ち出せずにいるのだから、地域社会が助け合わずには乗り越えられない状況なのであった。にもかかわらず、一部の米商が利欲に走ってしまった。窮民は寺鐘を乱打し、おのおのこん棒や得物を引っ提げ、怒声を上げて米商を襲った。家財家屋を破壊し、店の者を引きずり出し、蔵を開いて米を打散した。

この事態を、総三郎は傍観した。住民の怒りは当然のことであろうと判断したからである。木更津の繁栄を支えているのは海運業に携わる日雇い労働者たちなのだから。彼らを軽んじた報いであり、略奪された米は炊き出しのようなものだ、と総三郎は思うのだった。

騒動の翌朝、町は嵐の後のように荒れていた。打ち壊された米穀商は二十軒余りにおよび、多数の捕縛者も出たようである。破壊された商家を眺めながら、総三郎は得も言われぬ虚しさを覚える。なぜだか無性になをの笑顔が思い出された。なをの死を境に、何かが決定的に変わってしまった気がする。三千太郎は家に閉じ籠ったまま道場にも来なくなってしまったし、豊は髪をばっさり切り、連日道場に出て門弟をしごいている。どちらも心の中で何か壊れてしまったのかもしれない。オヤジさま、と呼ぶなをの声がなつかしい。なをの作るおかきは実に美味かった。総三郎は殺伐とした山手通りを歩きながら寧日を感じるのであった。

「ひどいものですね、オヤジどの」

と声をかけてくる者があった。高柳村の名主、重城保。このとき三十三。

幼少の頃から秀才の誉れ高く、その識見の高さは総州随一と称されたほどの名士である。後に千葉県議会初代議長、第一回衆議院議員となる男だけに、細面の上品な風采にもかかわらず、すでにその片鱗をうかがわせるような貫禄もある。

「今度ばかりは、自業自得ですな」

総三郎が冷めた反応を示すと、重城も深くうなずいて共感を示した。

「大阪の市中でも最近、千軒近い商家が打ち壊されたと聞き及んでいます。まこと由々しき事態です。今後、江戸や横浜辺りにも飛び火する恐れがあるでしょう」

実際、この月の下旬、江戸でも大規模な打ちこわしが起こるのである。これが波及して六月には秩父地方の零細農民が一揆を起こし、武蔵、上野方面へ拡大して十万人規模の大一揆となる。一帯の豪農や富裕商人はもとより、横浜の貿易関係者や代官所、陣屋なども襲撃された。もはや幕府の力だけでは鎮静できず、近隣諸藩の兵力が動員され、大砲まで持ち出す始末であった。

その前触れとでもいうべき混乱が、木更津の米騒動だったのかもしれない。

「このまま我らが何もせずにおれば、將軍のお膝元が崩れてしまうのではありますまいか」と、重城ほどの男が憂色を浮かべるのを見て、さすがに総三郎もぬきさしならぬものを肌で感じざるを得ない。

「重城さん、貴兄はこの先、如何すべきとお考えか」

「このところ、町人や農民の間で貧富の格差が顕著になってきたと見受けられます。田畑を手放して小作人となる者も後を絶たない。住民があまねく安衣安食にあずかれる世を是とするなら、利に走りがちな商家や豪農層を対象に、遵守すべき規則を定める必要があるかもしれません」

ほう、と総三郎はうなずいて、片手で顎をさすった。

「実は、このように考えているのは私ばかりでなく、北片町の長須賀屋卯八さんや、三河屋喜平次さんなども同意見です。木更津は湾内でも有数の大湊ですし、江戸の城米輸送の

拠点でもありますから、この町が機能不全に陥りでもすれば、たちまち府内が混乱をきたします」

「おっしゃる通りですな」

「商人と屏風はまっすぐでは立たないという俗諺もありますが、今回の米商どものように、あきらかに人倫の道を外すとあらば、島屋門の力をお借りしてでも、まっすぐに正すべきではないかと愚考しておる次第です」

総三郎は顎をさすりながら、破壊された米屋の店頭をじっと見つめた。

「オヤジどの、何らかの策を講じるためにも、いちど会合の場を設けませんか」

「わしに、異存はありません」総三郎は、刀の柄にどっしりと腕をもたせ掛けた。

その仕草に深い意味などなかったが、重城は心強い気がした。

道場の板敷を踏み鳴らして、豊が正道の面鉄を打った。しかし、打ちが浅いと判断した常盤之助はこれをとらない。両者とも間合いを詰めて打ち合い、やがて鏝迫り合いとなった。豊がぐいぐい竹刀を押し込んでくる。正道は押し返して振りかぶった。その瞬間、すかさず腰を沈めた豊が正道の左胴を打った。

「胴ありッ」常盤之助が手を上げた。

一礼の後、端座して面の紐をほどいた正道は、感嘆おくあたわざる様子で笑った。

「俺から一本をとるなんて、豊姉エは恐ろしすぎる」

豊も面をぬいだ。

「三本勝負の、最後の一本じゃないか。まぐれだよ」
手拭いで額と首筋の汗をぬぐった。

米騒動の翌日とあって、今日は道場を休みにしている。

昼九つの梵鐘が、静まり返った町に鳴り響いた。三人は汗で濡れた稽古着のまま、羽目板に並んでもたれかかった。

武者窓から差し込む光を眺めながら、豊は独り言のようにつぶやいた。

「なをのあられが食べたいねえ」

「いつもなら、なをさんが昼飯を持ってきてくれるころだね」常盤之助もなつかしように目を細めた。

片膝を立てた正道は、眉目をくもらせて天井を振り仰いでいる。

「ミチタは、当分立ち直れそうにないか」

常盤之助がうなずいてみせると、豊は膝を抱えて前を睨み据えた。

「そりゃそうだ。あんな辛い目にあって、立ち直れるわけがない。一生立ち直れないかもしれないよ」

道場の上がりかまちに人影が見えた。地曳の印半纏を羽織った新一郎である。

「マサミつつあん、ここにいたか」

豊と常盤之助に会釈すると、正道の対面に腰を下ろしてあぐらをかいた。

「帰港したその足で山手通りを歩いてきたが、糺屋も相善支店も見ると影もないやね。ひどくやられたもんだ」

豊は膝を抱えたまま新一郎に顔を向けた。

「すまは、どうしてるかい」

「毎日、泣いてる。なをの顔を思い出すたびに涙が出るって」

それを聞いて、豊も目頭が熱くなるのだった。

「しばらく休ませようと思って大田村に帰したんだが、実家にいる方がなをとの思い出に困まれて辛いらしい。一日と経たずに船宿の方に戻って来ちゃった。おれも早く帰ってやらねえと」

新一郎は気持ちを切り替えるように片袖をまくりあげ、膝頭に手を置いた。牡丹の入れ墨が鮮やかだった。

「さてとマサミつつあん、江戸橋周辺で聞き集めた話を報告するぜ。いよいよ幕府が長州へ攻め込むそうだ。旗本筋の話によると、総大将は紀州徳川中納言。防長二州を五方面から攻囲するらしい」と身を乗り出して語り出した。

正道も常盤之助も目を見張って新一郎の話に聞き入った。

豊は立ち上がると、

「あたしは政事の話に興味ないから」

独り言のようにつぶやいて、その場を離れた。

藍甕の間を歩いてゆくと、いつものところに縫之進が座っている。銀のキセルをくわえて刻み煙草を丸めていた。

「仕事、はかどってるかい」

「丈なす髪を短くして、ずいぶん頭が軽くなったろう」

「まあね。もう二度と鬚は結わないよ。女であることをやめた。一生かむろで過ごすつもりさ」

「あれあれ、そうはいつでも、かむろの豊姉エは艶っぽいぜ。これからも男が言い寄ってくるから、良い男を見つくるって婿にしな」

縫之進はからかうように笑いながら縁台の端をぼんぼんと叩いた。

失礼するよ、と豊は腰を下ろした。熱い番茶の注がれた湯呑を受け取ると、しばらく湯気を眺めて黙り込んでいたが、やがてふうと深いため息をついた。

「なをはさ、まさか自分が死ぬなんて、思ってなかったよね。あたしさ、なをのことを思うと、可哀そうで可哀そうで夜も眠れないんだよ。まだ十七歳じゃないか、あまりにも惨いよ」

心につつかえている気持ちをことばにしたら、また涙が溢れてくるのだった。

縫之進は煙草を深く吸い込み、細い煙を頭上に向かって吹き出した。

「人が生れてから死ぬまでのことを人生というなら、なをの人生は幸せだったと、おれは思うぜ。あの子は誰からも愛された。素晴らしい一生じゃないか」

縫之進は、目頭に手拭いを押し当てている豊の肩に手を置いた。

「可哀そうなのは、残された人たちの方さ」

そうつぶやいて、キセルの火皿から上る紫煙を眺めるのだった。

慶応二年のこの時点で、世間は知る由もないことであるが、薩摩藩と長州藩の間で秘密同盟が成立していた。

徳川幕府というものを現代の政治における〈与党〉に例えるなら、薩長同盟は、二つの革新派野党が連立を組んだようなものである。

長州藩は一貫して幕府の施政に批判的で、そもそも国政の実権は天皇が持つべきであると唱えている。過激な革命路線を猪突猛進しており、その熱狂的な思想は吉田松陰から高杉晋作、桂小五郎らに受け継がれている。一方、薩摩藩も早くから幕政改革を推進してきた革新派であるが、あくまでも改革路線を貫いており、その慎重かつ周到な姿勢は島津斉彬から西郷隆盛、大久保利通らに受け継がれていた。両藩とも、劣化して機能不全に陥っている徳川幕府に見切りをつけ、新たな政治体制の確立を目指している。国の統治権を征夷大將軍から天皇へ移行し、公議公論を尊重すべしとする点で方向性が一致しつつあり、土佐の中岡慎太郎や坂本龍馬の周旋も功を奏して、ついに野党第一党ともいべき〈薩長同盟〉の実現をみたのである。

その既成事実気づかないまま、幕府は長州征伐に乗り出そうとしている。

地曳新一郎が江戸から持ち帰った情報の一つに、防長二州を五方面から攻囲するという戦略があったが、攻め口の一つを任せられていた薩摩藩は出兵を拒否した。それでも、幕府の軍勢は総数十五万人。対する長州藩の軍勢は義勇兵を集めても七千人程度。幕府の既定路線に従わない長州藩を叩きのめすことで、徳川將軍家が天下に威信を示す絶好の機会が訪れようとしている。

「ですから」と正道は言った。

「今度ばかりは公方様も、姫路あたりまで御出陣遊ばされるかもしれませぬ」

大規模な戦となることは、もはや決定的であった。

先師中村一心斎の姿を肖らした掛け軸を眺めながら、「それにしても薩長の奴ばら……」

」と孫左衛門が眉をひそめた。

「関ヶ原の戦いに敗れた毛利と島津の子孫らが、今になって徳川家に復讐しているとしたか
思えんな」

それを聞いて正道は深くうなずきつつ苦笑した。「確かに、そうともいえませぬ」
笑い事では済まされぬという表情になったのは幸左衛門である。

「庶民は日々の飯米にも事欠くような塗炭の苦しみを味わっておるというのに、西国の外
様と陪臣は、尊王だの討幕だのと、いったい何を考えておるのか」

「それをこの目で確かめに行きたいのです」と身を乗り出したのは常盤之助であった。

「マサ兄ィと共に、天下の形勢を直に見て来てから、我が島屋門の進むべき道を講じたい
と存じます」

その凜とした眼差しを見て、幸左衛門と孫左衛門はちらと互いを見やった。三千太郎と
くらべて大人しく、目立たなかった常盤之助が、にわかにも頼もしく感じられたからである
。

不二心流はますます隆盛を極めている。門弟の広がりには房総半島を席卷しつつあり、こ
れならば正道が提唱する「島屋門を中心とした一大勢力の確立」という構想も画餅とはな
らないだろう。さらにこの年の十月、正統二世大河内縫殿三郎のお膝元、西小笹村（匝瑳
市）の地藏院に中村一心斎の新たな供養塔を建立する計画が進んでいる。地藏院は大河内
家の祖先伊藤河内守為安の白い愛馬を祀った堂宇であり、ここに流祖の碑を建てることで
不二心流の道統が大河内の血筋で世襲されていくことを暗に示すことになる。この式典は
各地の門弟にその旨を了解させる重要な機会となるだろうから、

「十月までには一度帰省するように」幸左衛門は念を押した。

何かを始めるのなら、この十月の式典で表明せよ、という含みもある。

幸左衛門は、一両小判や一分二朱の金銀、百文差を帳場筆筒から大量に取り出すと、こ
れを路銀にせよと惜しげもなく与えて、意気軒昂たる二人を激励した。

後で孫左衛門と二人きりになると、幸左衛門は入れたての玉露を一口飲み込んで、はか

らずも大きなため息を一つついた。

「こうなると、実心斎の離脱が惜しまれる。三千太郎のことも心配でならない」

孫左衛門はいつもの温顔を振り仰いで愛用の扇子を膝に突き立てた。親骨が鍛鉄製の鉄扇である。

「今年是不幸が続きますな。こんなときこそ、一族の結束を強め、支え合ってゆかなければならん。総三郎も、近隣の名主や商人らと何やら会合を重ねておるそうな。ともかく我らは、物心両面で若い世代を支えてゆきましょう。まだまだ隠居はできませんぞ」呵々と笑って鉄扇を開いた。金紙の扇面に紅い日の丸が描かれており、それをばたばたあおぐ様はあたかも戦国武将のようであった。

三千太郎の新居は空き家になっている。なをの遺品が整理され、土間の荒神様もどこかへかたづけられてしまった。三千太郎はその様子を、座敷に座ってただぼんやりと眺めていた。今は実家の母のところへ戻っている。

裁着袴を履き、脚絆を巻き付けた常盤之助は、新調したばかりの打裂羽織に腕を通した。しかし、大小を腰に帯びる前に、まだ眠っている三千太郎の傍らに座り込んだ。日の出前である。

このところ三千太郎は日がな一日奥の間に引き籠っている。何をしてもなく寝転がっており、髯も剃らず、総髪も乱れたまま、今朝は息まで酒臭い。

「ミチタ、そろそろ行くよ」

常盤之助が声をかけると、三千太郎はしばし体をよじらせてまぶたを開いた。

「ああ、今日、出発だったか。すまん、すぐ支度する」

見送りに出ようと掛け布団を払いのけたが、常盤之助は手甲を着けた手で菅笠の紐をつまぐりながら、洗い立ての顔をほころばせて話し出した。

「なあミチタ、知ってたか。上総国の全石高の六割は旗本知行地なんだってさ。だからこの辺り一帯は徳川藩とでも呼ぶべきもので、もし公方様が外様大名の脅威にさらされたら

、俺たちには押っ取り刀で馳せ参じる道義的責任があるんだそうだ」

「責任、か」と三千太郎は寝起きの目をこすりながらつぶやいた。

特に深い意味はない。大層な言葉が出てきたものだと思ったのである。しかし常盤之助は、さらに語気を強めた。

「農工商の志あるものを懲慚し、兵を練り、士気を鼓舞し、幕府を支えんがために軍を起こす。その中核を島屋門が担う。おれたちの手で房総の鎮めをして君側を浄める。今こそ、累世の幕恩に報いるときなんだ」と一息に述べ立てると、

「まあ、すべてマサ兄ィの受け売りだけだな」とおどけたように笑ってみせた。

江戸へ向かう明王丸の船出を、三千太郎は、豊と勝壽と共に見送った。短く切った豊の髪が、藍の小袖とよく似合っている。

徐々に明るんでゆく空の下に、富士の高嶺が手に取るように望まれた。雲ひとつなく晴れており、紺碧の海に小さな白い三角波が立っている。

船着場を離れる直前まで、正道は三千太郎の傍らにいた。

「我らは取るに足らない微賤に過ぎぬが、治国安民の志を貫けば、きっと徳川家のお役に立てるはずなのだ。そのためには、なによりミチタの武勇が必要になってくる。辛い気持ちにはよくわかるが、一日も早く立ち直ってくれよ」

正道と常盤之助は、船端から大きく手を振った。

房総半島に横たわる一塊の丘陵から朝日がさしはじめる頃、明王丸はかざっばりに帆を向けて、一路江戸へ向かって出航した。

「行っちゃったね」豊がさみしげにつぶやいた。

勝壽は三千太郎の方へ向き直ると、なんとなく襟足のあたりを搔いたりしながら、言いにくそうに切り出した。

「マサミつつあんも行ってしまったし、実心(齋)さんもないし、オヤジもあちこち飛び回ってるから、師範が足りないんだ。ミチタ、気持ちが悪く落ち着いているときでかまわん

から、ときどき稽古に出て来てくれ」

「まだ無理することはないよ」と豊が割り込んできた。「かわりにあたしが出るからさ」

「豊さん狂暴すぎて門弟が怖がってるんだよ」

「なにそれ。あたしちっとも狂暴じゃないよ。ホトケの豊さんじゃないか」と、目を細めて安らかな表情をつくってみせた。

三千太郎は、小さくなっていく明王丸を、いつまでも突っ立ったままぼんやり見つめている。

誰に向かってということもなく、豊が感慨深げにつぶやいた。

「徳川家のために一働きしたいなんて、まったく殊勝なことだよねえ」

「おれさ……」三千太郎が沖を眺めながら口を開いた。

「徳川家がどうなろうと、この国の行く末がどうなろうと、そんなこと、はっきりいって、どうでもいい」

それを聞いた豊は、やや間を開けて、

「ああ。どうでもいいね」声を落としてうなずいた。

棒手振りが豆腐を売る声が聞こえてくる。魚や青物を売る呼び声も高らかに、朝日に照らされた海岸通りを行商人が行き交い始めている。

湊を離れて間もなく、木更津の町は海岸線の一部となってかすんでしまった。明王丸の甲板から眺める海上は、陸から見る沖とは全然違った印象を常盤之助に抱かせた。

いつもは穏やかに見える江戸湾にも、荒々しい潮風が吹いている。大きめの波が船板を叩くたび、体が少し宙に浮き、次には下へ吸い込まれる。剣帆が大きく膨らんで、五大力船の細長い船型は海上を切り裂くように快走するのだった。

「ごぜき(五大力船)には垣立がないから、振り落とされないように気をつけろよ」新一郎が声をかけた。

そのごぜきよりも早く帆走している船もある。鮮魚を搬送する押送船だ。船槽の生簀に

漁獲物を入れて、活きのいいまま江戸へ卸すのである。そのため船型が五大力船よりも小型の流線形で、櫓まで使って全力疾走する。全国各地から来航する弁財船、苦船や茶船なども活発に往来しており、内湾交通の活況に常盤之助は目を見張る思いがする。

房総半島には高い山がなく、平均海拔は四十九メートル、日本一低平な地域であり、江戸前を南北にかけて包み込んでいる。御府内の食料物資の供給地でもあり、内房の沿岸には、椎津・今津・青柳・姉崎・五井・八幡宿の湊が連なり、その向こうの湾奥に蘇我・寒川・登戸・検見川、江戸近傍に行徳が望まれる。その位置を一つ一つ新一郎が指を差して教えてくれた。どの湊も各方面の街道に接しており、内陸へ人と物資が行き交っているのだった。

正道の顔色が悪い。こめかみに脂汗を浮かべている。

「おれはどうも、船に弱い」船端の方へよろけると、海に向かって吐いた。

そんな正道の背の向こうに三浦半島が広がっている。

横浜港は日米修好通商条約に基づいて安政六年に開港されたばかりであった。従来の神奈川湊は東海道に直結するため、国防上、外国船の寄港地にするのは避けたい。そこで入り海の対岸にある横浜村に新たな港を開いたのである。開港からまだ七年。外国船とおぼしき汽船が数隻停泊している。常盤之助は伸び上がってそれを眺めた。「それにしても、ごぜきは速いな。もう横浜が間近に見える」

「今日みたいに順風だと二刻半ぐらいで江戸に着く。だが、べた凧になると一日かかってもたどり着けない」

そうであれば、風にめぐまれた日の船上は気持ちも軽やかになろうというもの。新一郎が舵を取りながら唄い出すと、他の乗り子たちもいい声で和した。

へハアー 木更津照るとも

江戸は曇れ かわいお方が

ヤッサイ モッサイ ヤレコリヤ ドッコイ

コリヤコリヤ 日にやける

この舟唄、安政年間に木更津出身の噺家木更津亭柳勢が高座で唄い、江戸で大流行したものである。木更津甚句という。

流行といえば、もう一つ。

「しがねえ恋の情が仇、命の綱の切れたのを、どうとりとめてか木更津から」

の台詞で有名な歌舞伎の演目『切られ与三』も江戸っ子に好評を博したものであった。

主人公の与三郎は木更津にいた実在の人物で、地元親分の愛人お富に手を出してめった斬りにされたものの、奇跡的に一命をとりとめ、三年後に江戸でばったりお富と再会するのである。この実話が講談となり、三代目瀬川如皐の脚本で舞台化され、八代目市川團十郎が演じるに至って大当たりした。『死んだはずだよお富さん』の歌詞で有名な春日八郎のヒットソングもここが出所である。

確かなことはわからないが、与三郎は元、島屋の型付け職人だったという説もある。だとしたら大河内家の者にとって、切られ与三の存在は自慢の種だったかもしれない。さらにもう一つ付け加えるとしたら、「しよ しよ しよ しょうじょうじ」の歌詞で有名な證誠寺も、島屋のすぐそばにある。夜な夜なたぬきばやしを踊っていた狸の親分の墓も実在する。

などなど、話のネタが尽きない木更津のにぎやかな雰囲気が、新一郎たちが唄う舟唄の軽やかな調子からも伝わってくるようであった。

へハァー 泣いてくれるな 船出のときは

沖で櫓かいが 手につかぬ

ハァー 沖の洲崎に 茶屋町建てて

上り下りの船を待つ

「あれが、品川台場だ」

と新一郎が指差した海上に、人工の小島がいくつか見えてきた。

第一から第六までである。幕府が威信をかけて築造した洋式海上砲台である。

御殿山の土砂で洲の上を埋め立て、周囲に石垣をめぐらせて、塁壁から多数の砲門を突き出している。万が一、外国の軍艦が江戸湾奥に侵入してきた場合、この砲台の線で防衛するために作られたものである。しかし財政の悪化により当初十一基築造するはずだった計画は中断され、第四台場などは作りかけのまま放置されている。後に二つを残して解体され、現在では第三台場が公園となり、第六台場をレインボーブリッジの傍らに見ることがができる。

明王丸は、偶然にも浜御殿の幕府海軍所施設から出航した一隻の蒸気帆船とすれちがった。これから長州征伐の戦地に赴くのだろうか。遠くに船影が見えたと思ったら、たちまち眼前に迫って来た。煙出しから黒煙を吐き、舷側に付いている推進用木造外車が音を立てて回転している。弁財船よりも遙かに大きく、押送船よりも格段に速い鉄張りの船である。上甲板に黒い筒袖袋姿の海軍士官とおぼしき人たちの姿も見えたが、蒼々たる海面を白く泡立ててあっという間に通り過ぎてしまった。常盤之助は口を開けたまま言葉も出なかった。

「すごい迫力だったろう」正道が興奮したように言った。まだ吐き気が治まっておらず、手拭いを口に当てている。常盤之助が感嘆のため息とともに大きくうなずくと、正道は顔色蒼白のまま口元に笑みをたたえるのだった。

「幕府は外国から蒸気船をどんどん買っているそうだ。あのような軍艦があれば、四海平定はたやすい」

幕府の海軍力は日本一である。諸藩も独自に軍艦を建造したり輸入したりしていたが、まだまだ幕府海軍の足元にもおよばない。この時期、幕府が国籍旗として艦上にひるがえしていた日の丸が後に日本の国旗となり、「ようそろ」のような航海用語も、「いま向いている方向で問題なし」すなわち「宜く候（よくそうろう）」という武士言葉のなごりな

のである。

四時間半ほどの航海も終わりに近づき、明王丸は江戸の木更津河岸に船首を向けた。江戸橋南詰めの西側がその場所である。

新一郎は甚句を口ずさみながら櫓を操って漣筋に沿って進み、日本橋川の堰に舷側を寄せた。

船宿と土蔵が軒を連ねているが、そこに打たれた屋号はすべて木更津に本店がある。まるで木更津湊へ舞い戻って来たような、なんとも不思議な感じだと常盤之助は思った。

正道は上陸早々手を膝にしてふうと一呼吸すると、気持ちを切り替えたように蒼白い顔を振り上げた。

「今朝食ったもんは、みんな海にぶちまけちまった。二八そばでも食いに行くべ」扇子を開いてすたすた歩きだした。

「マサ兄ィはたくましいなあ」
常盤之助は笑わずにはいられなかった。

江戸の人口は、享保年間には百万人を超えている。同時代のロンドンやパリの人口の約二倍という驚異的な数であり、世界最大級の都市に成長していた。町割りの七十パーセントが武家地であり、他は寺社地十五、町人地十五パーセントとなっている。参勤交代で江戸入りする大名諸藩の屋敷、徳川家の旗本・御家人の住宅といった広大な敷地の隙間に、庶民の暮らす九尺二間の裏長屋があったわけである。

木更津河岸から少し歩くと、五街道の基点である日本橋に出る。金貨の鑄造をしている金座、三井の越後屋、呉服の白木屋、鯉節のにんべんなどが軒を連ねており、橋の南詰に、幕府の法令が提示される高札場がある。町方を支配する町奉行所も近くにあった。

高札の前に立つと、ここが日本の中心なのだと実感する。この国の統治者が徳川家であるのは疑いもないことだと思える。正道と常盤之助は新調したばかりの羽織袴を着て、西小姓組七百石の旗本で市ヶ谷牛込に屋敷を構える斎藤久右衛門を訪ねた。

大身にしては腰の低い久右衛門は、息子の常次郎を伴って玄関に現れ、二人を丁寧に迎えた。

齊藤家の知行地は木更津近傍の横田村にある。この名主惣代葛田藤右衛門を介しての訪問であった。

正道の名は木更津に縁のある者なら知らぬ者はなかったし、常盤之助の存在も、鎖鎌の使い手の弟と聞けばすぐに認知された。

斎藤久右衛門はへりくだった様子で、

「長州征伐も、いよいよ戦端が開かれたようですね」

と二人に茶を勧めた。真っ先にその話題に触れるあたり、世の騒擾を憂いているにちがいない。

しばらく江戸表や木更津界隈の近況を語り合った後、正道は茶托に湯呑みを置くと、居住まいを正して本題を切り出した。

「文久三年の騒乱の際、鎮定にひと月あまりの時間を要したことを覚えておられるでしょうか」

と正道が言うところの騒乱とは、三年前、房総九十九里地域で起こった武力蜂起のことを指している。首謀者は尊攘派浪士たちで、「尊王攘夷救世」の旗を掲げ、無宿者や百姓の二三男、商家の徒弟ら二百人あまりを糾合してへ真忠組を旗揚げし、夷賊打倒と気炎を揚げ、近傍の商家や豪農に軍資金千三百両、米百二十俵、武具の類を供出させて挙兵した。幕府は周辺諸藩に討伐命令を下したが、鎮圧までにひと月もかかっている。

「なぜそうなるのか。房総一帯の治安を守る確固たる軍事組織がないからです。文久三年の件は、諸藩から招集した兵を取り纏めて鎮圧軍を編成している間に被害が大きくなってしまった。既存の関東取締出役や、配下の目明しなどは、この規模の騒乱にまったく対処できなかったわけです」

そう熱っぽく語る正道の話に、久右衛門と息子は引き込まれるように耳を傾けている。

話は、さらに続く。

「元治元年、長州藩が下関海峡を通過する外国商船を砲撃した報復として、エゲレスの上陸部隊に砲台を占拠されるという失態を犯しました。しかしこのような事態は、海と接するどの地域でも起こり得るのです。もし、房総半島に外国の軍隊が上陸した場合、どこの藩がこれを迎え撃つのでしょうか。まさかその時になって、慌てて諸藩の兵を動員し、家格を忖度しながら陣容を整えるつもりでしょうか」

久右衛門は答えられなかった。そのような事態が起こるのを懸念しつつも、具体的な方策を議論したことはなかったし、各砲台や沿岸警備を担当している諸藩がそれぞれに対処すればいいのだと思っていたふしもある。

正道は一膝すすめて切論した。

「江戸湾岸の各地に据えられた我が国の砲は、外国艦の備砲と比べて火力に雲泥の差があります。我が方の砲架には、お寺の鐘を横向きに乗せて大砲に見せかけているようなところさえある。このような有り様では、ひとたび外国艦隊の砲撃を受けて上陸された場合、郷土を蹂躪されるのを指をくわえて見ている他にすべもありません」

斎藤親子は息を飲んで話に聞き入っている。

「わたくしども、不二心流の門人は房総各地におり、道場間で密に連絡を取り合い、組織としてもまとまっております。これを母体として、旗本知行地、寺社領、天領などの警備を持って任ずる一隊を創立し、各地の農民、商人の子弟を訓化し、義気を鼓舞して練兵し、君側を浄めんがための兵旗を翻らさんと欲するものにございます」

久右衛門は、ぱしっと扇子で掌を打った。

「正道殿、よくぞ申された。なんと見上げた志であろうか」

常次郎も感激して、「拙者も同志に加えてくだされ」と目を輝かせた。

正道は内心ほっと胸をなでおろし、ちらと常盤之助に視線を送った。

久右衛門は膝に扇子を突き立てて、

「然らば、わしの方からも、これはと思う人物をそなたにご紹介つかまつろう。横浜仏語伝習所というところに、福田八郎右衛門という御仁がおります。元、日光奉行支配組頭、

川上金吾助殿の二男で、昨今、旗本福田家に養子に入ったばかり。この者、大変な秀才で、仏語伝習所の一期生にして、すでに彼の地の言葉を翻訳しておるほど。幕府の新たな軍制はフランス式を模倣しておりますから、これからの時代になくはならない大人物といっても言い過ぎではありません。しかもこの者、幕閣の小栗忠順殿や栗本鋤雲殿にも目をかけられておるほどですから、必ずや正道殿の至誠を汲み取り、上の者に取り次いでくださることでしょう。常次郎を同行させますから、さっそく横浜へ参られては如何か」とのことばを受けて、常次郎は顔に喜色を走らせた。直心影流剣術に励みながら、時世に目覚めつつある十九歳である。

正道と常盤之助は、幸先よしといった心持で平伏した。

「横浜」という町は、開港以前は戸数五十程度の漁村にすぎなかった。正道たちも神奈川湊の存在は昔からよく知っていたが、横浜の名を耳にしたのはつい先年のこと。江戸湾岸の名もなき一角が、海外貿易の門戸としていちじるしい発展を遂げたのを眼前にした正道と常盤之助は、菅笠を少し傾けて異国情緒あふれる街並みを眺め渡した。目抜き通りには煉瓦造りにガラス窓のはめられた外国商社が建ち並んでおり、和商の店舗も相当数進出している。まだ始まったばかりの活発な貿易活動の一端を見る思いがした。取引されている商品を見ると、圧倒的に生糸が多い。外国人らは、世界基準からみても最高水準の生糸を日本の名産品と見定め、国内需要などまるつきり無視して買い占めに奔走しているという。蚕卵紙や繭の高騰の原因はこれに相違なく、正道は、武州で起きた大規模な一揆の元凶を見た思いがする。

常盤之助はそれよりも、外国人の容姿に驚いていた。肌の色も骨格も日本人と比べて異質であり、何より瞳の色の違いが信じられなかった。鬼か妖怪の類にすら見えてしまう。

ここ数年来、木更津近辺でも攘夷にまつわる事件が多かったが、今になって彼らの心情を少し理解できたような気がする。こんな異相の連中が町中をうろろしていたら気味が悪い。運上所の警備をしている武士を相手に高圧的な態度で声を荒げている外国人を見た時

、常盤之助は内心「斬ってやろうか」とさえ思った。

日本全国を席卷した攘夷思想は、この頃になると、その急先鋒であった長州藩でさえ手のひらを返したように自説を撤回している。長州、薩摩の両藩は、それぞれ藩を挙げて実際に外国艦隊と一戦交えてみて、領内にも人員にも甚大な被害を被ったのである。藩政府の要人や志士たちは彼我の火力の圧倒的な差に驚愕し、攘夷の不可を身をもって学んだのだった。これ以降、むしろ積極的に外国と親交を結んで洋式軍備の増強に努めることとなる。その成果が、今回の長州征伐において現れて来るにちがいない。

ともあれ、正道たちは常次郎に案内されて木造二階建ての洋館へ上がり、そこで旅装を解いた。ここの店舗の経営者は日本人であるらしかった。

「西洋夷の店なぞでは食べたものではありませんよ」常次郎が渋い顔をした。「なんせ、獣肉を出すんだから」

「それなら」と常盤之助が脚絆をほどきながら言った。「おれはイノシシの肉なら食べられる。好物だよ」

「いえ、あいつらが食うのは牛です」

「うわ。そりゃあ無理だ」あきれたように笑った。

欄干にもたれかかって下の通りを眺めていると、頭髪を三つ編みにした清国人や、英仏の水兵とおぼしき連中をよけるように、股引姿の日本人が大八車に茶箱や陶器を積んで通り過ぎてゆく。奇妙なことばを大声で発しながら闊歩する外国人のふてぶてしさとくらべたら、なんと小柄で慎重深い歩き方だろう。このままでは日の本が、不遜な外国の植民地にされてしまうのではないかと一抹の不安にかられたりもする。

そこへ、鞍壺に腰をすえ、威風堂々たるかっぶくの若侍が青鹿毛の駿馬に揺られてこちらへ向かってくるのが見えた。正道も常盤之助も、それが福田八郎右衛門であることをすぐに察した。常次郎はかしこまって、

「あのお方です」

と、一目置いた様子で言った。

福田八郎右衛門の実父川上金吾助は、日光奉行支配組頭、中之条代官などを歴任した名代官であり、弘化四年の善光寺地震、嘉永七年の大飢饉の際は年貢の減免を断行し、農民の救済に尽力したことで有名である。領民は金吾助の善政を讃え、生神として祀ったほどだ。養父の福田道昌も佐渡代官、勘定吟味役、先鉄砲頭、甲府町奉行などを勤めた名門の旗本であった。

八郎右衛門は馬から下りると、駒繋ぎに手綱を引っかけ、やや肥満した体型にしては足音もたてずにいそいそと二階へ上がって来た。色白の柔和な顔立ちで、鬚はきっちり大銀杏にしている。右の耳たぶに大きなほくろがあるのが印象的だった。さらには、

「お招きにあずかった福田八郎右衛門道直にござる」

と発した声色のかん高さは、あたかもうら若き女性のものであった。

福田の通う仏語伝習所は横浜弁天町にある。フランス語を習得するための語学学校で、この時期はメルメ・カシヨン神父が事実上の校長であった。幕府は、製鉄、造船、軍事など、最新技術の導入にあたってフランス人の指導を仰いでおり、そのため仏語を理解できる士官の養成が急がれている。福田は同期生の栗本貞次郎とともに『仏語学校の規則』を和訳をするなど、すでに群を抜く存在となりつつあった。

父親同士のつながりがある常次郎と福田はすでに面識がある。常次郎が今回の来訪の趣意を簡単に説明した。

正道は平伏して、

「我ら、上総国不二心流大河内縫殿三郎が門人、大河内阿三郎正道ならびに常盤之助と申します。福田様の御高名を伺い、まかり越しましてございます」と口上を述べたが、途中で福田は笑い出した。

「おやめくだされ。それがしなど大した者ではござらぬゆえに」

「しかし先生は、幕府きつての秀才とか」

「それがしごときが秀才ならば日本国はお終いです。いやはや、久右衛門殿はどんな話を

されたのやら」とかえって恐縮している様子であった。

「先生は、仏語の達者と聞き及んでおります」

「とんでもない。まだまだ半人前です。君家のお役に立てるよう昼夜兼行で学んでおる次第です。ところで、先生はおやめくたされ。福田で一向かまいません」と、どこまでも謙虚な男と見受けられた。

まずは一献ということで、常盤之助が店の品書きから旨そうなものを見つくるって女中に注文した。

埠頭に近い店なので、潮風が心地いい。爛鍋が運ばれてくるまでの間、四人はあいさつ程度の雑談をした。欄干越しに見える海の方こうに房総半島がかすんでいる。日中の暑さがまだ残っていたが、この時代の人たちは『養生訓』の影響で、冷えた酒を飲むと体を壊すと信じていたらしい。少し打ち解けたころ合いを見て、正道が爛酒を差しつつ国事の話を持ちかけると、福田は居住まいを正した。

「拙者は、数ならぬ身なれど、三河武士の後裔として幕府に身命をば捧げる覚悟です。神祖徳川家康公は天下泰平の基を開かれた。にもかかわらず、三百年来の重恩を忘却し、御公儀に敵する長州のごときは亡国の元凶に他ならぬ。拙者は、断乎たる決意をもって徳川宗家に忠義を尽くし、奸賊を誅戮せんことを東照神君に誓うのみです」

色白の福田の頬が、みるみる紅潮した。身の内にたぎる熱い思いが、聞く者の心にもひしと迫って来る。常次郎などは目を潤ませて、

「福田先生のお考えにまったく同感でござる」と膝を打つのだった。

正道の方も自家の所信を述べて、郷里に佐幕の一隊を創立したい旨を伝えた。福田は深く首肯して、

「君家の御厚恩に預かりながら、昨今は尚武の気風を失い、品川の娼家で遊びほうけているような直参の子弟も数多おるといふのに、大河内殿らの志の高さには感服つかまつる。その有志隊創立の件、必ずや然るべき要職の方にお取次ぎ致しましょう」

福田は正道と常盤之助の目を交互に見つめた。どこまでも色白で、髯の剃り跡もないほ

どつりとした面立ちであるが、忠義一途な三河武士の誇りを心中深く秘めているのが、その凜とした眼差しからうかがえるようであった。

座敷に膳部が運び込まれた。

若い常次郎は待ちかねたように田楽を頼張り、酒も手酌で威勢よく飲んだ。

福田はちびりちびりと飲みながら上品な手つきで芋の煮ころばしや茹でダコをつまんでいたが、シビ(まぐろ)の刺身とふぐ汁にはいつまでたっても箸を付けなかった。常盤之助が不思議に思っただけ理由をたずねると、福田は申し訳なさそうに首をかしげて苦笑した。

「シビは死の日に通じるもので不吉とされておるのです。ふぐも、本来なら御馬先で討ち死にすべき武士が、万一その毒に当たって死ぬようなことがあれば末代までの笑いものとなるのでいただけませぬ」

常次郎がおどけたようにうなずきながら合いの手を入れた。

「ふぐは喰いたし、命は惜しし。武士にはいろいろ面倒な禁忌があるのです。おれは食欲には勝てませぬが」

四人は大笑いしたものの、武士という職分もなかなか大変なものだと常盤之助は思った。正道もきつと同じことを思っただろう。

その晩、横浜港から短艇に乗り込んだ三人を、福田は棧橋に立って見送った。

「長州征伐の見聞を終えましたら、またぜひともこちらにお立ち寄りください。拙者も貴殿らと共に西国へ参りたいが、なにせ仏語の習得が急がれる。どうかお氣をつけて」

福田のついで外国の商船に便乗させてもらい、海路上方へ向かう。正道は福田の手を強く握りしめた。

「あなたと出会えたことが最大の収穫です。この先、我ら旗を一つにして戦いましょう」
福田は柔らかな顔をさらに微笑ませて深くうなずいた。

常盤之助が、

「福田様、仏語で、さらばごきげんよろしうは、なんと申すのですか」と声をかけた時、

西洋人が舵を取る短艇がゆっくりと棧橋を離れた。

「この場合は…」と福田はしばし考え込んで、「ボン、ボヤージュ。ですかな」

艫に立った常次郎が伸び上がった福田に大きく手を振ると、短艇は沖に錨泊している商船に舳先を向けて前進した。海上に満月がまばゆく反射している。

福田も棧橋から身を乗り出すように袖を振って、

「ボン、ボヤージュ、良い旅を！」とかん高い声を上げた。

青葉を震わせて鳴いているのは油蝉だろうか。軒に下げられた風鈴の音に交じって、西瓜や水売りの呼び声が往来に響いている。

木更津湊の船宿へ三河屋の暖簾を最後にくぐったのは、へ藍屋の当主、稲次作左衛門だった。この人物、日本長者番附にも名を連ねたほどの豪商で、代々薬種商を営んでいる。座敷にはすでに店主の仁吞喜平次、青物商へ長須賀屋の秋元卯八、総三郎が座しており、談論風発している最中であつた。

「この暑いのに、精が出ますなあ」

と扇子をあおぎながら入って来た藍屋作左衛門は、皆を見回して含み笑いを浮かべた。どこか小ばかにしている感じがしないでもない。

さっそく総三郎が膝をにじらせた。

「五月の米屋騒動以来、不穏な空気が木更津をおおっています。そもそも発端は、凶作や災害に見舞われた場合、米商は在米を他国へ売らぬという、津留の約に反したことによる。あの規約違反に対して、どれほど民が怒ったか。打ちこわしの気運はまたたく間に長須賀、祇園、久津間から、奈良輪、神納辺りまで拡大してしまった。彼らの要求は、いまや米の安売りだけにとどまらず、小作米の減免、職人の手間賃および日雇い稼ぎの賃金の引き上げなどですが、癸丑以来、国難による市場の混乱をかんがみれば、これらもやむを得ない要求ではありませんまいか。まずは我ら商家が民を軽んじることなく、不況に乗じて投機的な利に走ることを厳しく戒め、幾ばくかの金穀を出し合い、積極的な窮民救済の策を

講じることが肝要かと存じます。ぜひ、藍屋さんにもご助力を賜りたい」

藍屋作左衛門は暑苦しそうに、着物の襟を少し開いて扇子であおぎながら、

「売利を得るは商人の道なり、商人の売利は士の録に同じ。ということばがありますなあ」と言つて、こんどは髷の下あたりをせわしなくあおいだ。

「確かに、あの騒動のときの米穀商のやり方はよろしくなかった。今後あのような失態をおかさないために心がけを改めよというのなら、わたしも大いに賛成です。ですが、あきない自体に規制を設けようというのであれば、これはまた別の話にて、わたしは賛同し兼ねますな。あなた方も木更津商人なら、天下の財を通用して万人の心をやすむるという心意気があるでしょう。そこに規制を加えれば、財の通用を停滞せしめることとなり、結果的に万人の心を乱すことになる。我々はもうさんざん、お上の改革の失敗を見てきたではありませんか」

総三郎は、その点については率直に首肯し、作左衛門の言に一理あることを認めながらも、一膝進めて訴えた。

「聖人、仁を以て下民を仁むと云うではありませんか。民が窮しているのは眼前の事実です。我らが手をこまねいている間にも、多くの家族がかまどを返し、一家離散、流亡し、農村では間引きの弊も増すでしょう。なるほど商人の売利は武士の俸禄と同じです。なれど、不正の売利はそのかぎりではない。商人が真に市井の臣であるならば、今は私心と利を捨てて民につくすべき時であるとわしは信じます」

作左衛門は、掌を軽く扇子で打ちながら失笑した。

「私心と利を捨てたら、子孫に財を残せないでしょう。我ら商人は、武士のように家禄もなければ、農民のように耕す土地もない。あるのは蔵に納める金穀だけなのです。総三郎さん、あなたは、今は私利を捨てよとおっしゃる。ならば具体的に答えていただきたい。その今とは、いつまで続く、今なのか。わたしとて遊んでおるのではありませんよ。この大不況のただ中で生き残りをかけて戦っておるのだ。戦国の世と同様、強き者が生き残り、弱き物は滅びる。悲しいかな、これが世のならいです。富者ですら、明日をも知れぬ。

総三郎さん、これこそが、眼前の事実なのではありませんか」

さすがに、木更津古来の豪商としてうたわれた藍屋当主の言であった。この家は代々好
学文雅の士を輩出し、多くの文人墨客を支援してきた。いわば木更津文化を育んだ母体と
もいべき家柄であり、それゆえに、総三郎が最も頼りとしていた存在でもある。藍屋の
賛同がなければ商家間の協調は難しく、それどころかきっぱり拒否されたと知れば、誰
も総三郎の話に耳を傾けなくなるだろう。

作左衛門が退出した後、さすがの総三郎もうなだれてしまった。長須賀屋卯八も所在な
く扇子で首を叩いており、毅然として顔を上げているのは仁吞喜平次だけだった。風鈴が
ときおり音をたてた。

喜平次は高水村から婿に入った男で、生来商人というよりも武人の風格があり、早くか
ら直心一刀流剣術の修行に打ち込んでいた。弁がたち、胆力もあり、商人にしておくの
はもったいないと揶揄されたものである。運送業という商売柄、木更津久留里間を足蹴く
往来しており、一帯の事情に広く通じてもいる。どうやらそのあたりから発想を得たもの
と思われ、

「川名里鹿どのを頼ってみてはどうか」と、確信に満ちた様子で言った。

それを聞いて長須賀屋卯八は思わず膝を打った。「なるほど。それは名案だ」

総三郎はぴんとこなかった。その名前に聞き覚えはあるものの、なぜこの局面で女の名
前が出てくるのか、まったく推論の糸口さえつかめない。いかにも不可解そうな総三郎の
表情見て、喜平次は拍子抜けしたように笑い出した。

「横田の川名どのですよ、大奥の」

「ああ」とようやく総三郎は、その人となりを頭に思い描いたようである。

「大奥」という、徳川将軍の後宮について、人々は知っているようでよく知らない。将軍
のもうけた子に血統の疑問が残らぬよう男子禁制となっているのは周知の通りだが、内部
のことは外に対して固く秘匿されていたため、その内情は知り得ない。誤解されやすいこ

ととして、奥女中はすべて武家の子女と思われがちであるが、中には町人や農民の娘もいた。

江戸城本丸御殿の建坪は一万一三七三坪で、その約半分を占めるのが大奥である。ここに千五百人ちかい女性たちが住み込みで働いている。男の世界と同じように様々な職制があり、厳格な序列もあった。奥女中の筆頭は〈御年寄〉で、幕閣の老中に匹敵する権勢を誇ったといわれる。将軍のお手付き以外は生涯不犯、出世して上級女中となれば中途退職は許されず、一生奉公となった。

天保の改革の際、大奥に突き付けられた贅沢禁止命令に対して時の御年寄姉小路局は、「わたくしどもは男女の欲を捨て、一生独身で奉公する身なのです。多少の贅沢ぐらい見逃すべきではないか」と叱責して取り合わなかったという。

将軍のお手付きとなれば、下積みを経ずいきなり〈御中臈〉という高い役職をもらえた。しかし、そういった例は極めて少なかったようであり、やはりある程度上級の役職につかないかぎり、将軍の目に留まることは難しかったようである。

余談のようであるが、大奥では力持ちの女が重宝がられた。御台所や上位の奥女中は殿内の移動にも籠を使用することがあったから、それを担いだり、普段から荷物の運搬や水汲みのような力仕事もある。男手が一切ないのだから、どのような過酷な作業も女性のみでこなさなければならない。このような雑務をこなすのが〈御半下〉と呼ばれる女性たちで、御家人の娘ばかりでなく町人や農民の娘たちも従事している。その他、正式な職員としてではなく、上級女中の専属として雇われた〈部屋方〉などもかなりいた。大奥で働くとなると、採用にあたって、容姿、教養、特技などの御吟味があり、親の財力なども問われることになる。力自慢以外では、容姿端麗かつ知性にあふれた良家の子女をふるいにかける狭き門であった。

大奥に入った娘たちは、在職中に良縁を得て寿退社をすることが多かったという。大奥は選ばれし女が集う豪華絢爛たる別天地であり、そこで働いたという経歴は今でいうところの一流女子大学卒業以上の箔ともなったから、実家に縁談話が殺到するためだと思われる。

る。

総三郎がこれから会いに行く川名里鹿も大奥女中の経験者であるが、退職した理由は結婚のためではなかったらしい。横田村（現、袖ヶ浦市）の豪商川名惣左衛門の長女である彼女が、幼くして二之丸の御女中に出仕したのは、その利発さと愛らしさを貝淵藩林家に見出されたからだという。大奥では御年寄万里小路局のそばに仕えて将来を嘱望されていたが、不幸にも祖父と父親が相次いで亡くなったため、里鹿は職を辞して川名家の家督を相続するために帰郷したのであった。その後は婿をとり、今では三人の子供の母親となっている。

横田へ向かう道すがら、駄馬の長い行列とすれ違った総三郎は、これまで川名里鹿という女のことをよく知らなかった理由に思い当たった。駄馬を引く人夫の半纏に染められた文字は、川名家の屋号（河内屋）のもの。酒と醤油の醸造、呉服、油の卸し商を営み、江戸にも支店を構える豪商である。河内屋はその豊富な商品の船積みを、木更津ではなく姉ヶ崎の今津湊でしていたのだ。それゆえ里鹿との間に地縁がなく、しかも総三郎は大奥なるものに興味がなかったから、これまでまったく関心を抱いたことがなかったのだろう。率直なところ、たとえ奥女中の経験者であろうとも、総三郎は治国安民のような大志を女と語りたいとは思わなかった。気が進まないそぶりを喜平次や卯八の前で露骨に示していたのだが、

「背に腹は代えられないでしょう」

とたしなめられては二の句が継げず、こうして横田を目指して歩いている。

田の草刈りをしている老人に、

「川名さんの屋敷はどこかのう」と呼びかけると、老人は曲がった腰をゆっくり上げて、両腕を広げた。

その仕草を見て要領を得なかった総三郎は、耳の遠い爺様なのかと思い、さらに大声を上げた。

「すまぬが、川名さんのお宅を教えてください」

老人は、一二本生え残っている前歯をのぞかせてにやりと笑い、また両腕を広げるのだった。

ハタと総三郎は辺りを見回した。なるほどここらすべてが川名家の土地なのか。街道から小櫃川の河畔まで、見渡す限りの田畑すべてが、川名の敷地であるらしい。

そこからさらに歩いてたどり着いた主屋は、間口十五間以上かと思われる大邸宅で、さすがに少々圧倒されながらも奥に向かって声をかけると、川名里鹿その人が出迎えてくれた。

総三郎は久しく鬚を整えておらず、髯を剃ることさえ忘れていたのだが、里鹿と目が合った途端、急にしおらしく口元を隠したくなるような恥じらいを覚えた。まだ若かった頃、江戸で鶴と出会ったときも、こんな感情にかられたことがあったような気がする。

「ようお越しくございました。川名家当主、里鹿と申します」

その柔らかな物腰と、立ち姿の気品は、これが大奥で身に着けた品格というものであるうか。

丸鬚に飾られた簪も、笄も、櫛も、どれも高級なものであろうが見た目は地味で、着物も網代模様の小袖であり、奥女中時代を髣髴とさせるような派手さなど少しもなかった。であるにもかかわらず、何という華やかさであろう。匂い立つような美しさというものを生まれて初めて見たような気がした総三郎は、めまいにも似た恍惚感を覚えたが、慌てて臍下を引き締めると、

「突然に伺いまして、大変申し訳ござらぬ。島屋の総三郎と申します」

一瞬でも、女の色香に惑わされた自分をぴしゃりと叩くような気持ちで、総三郎はきつかりと頭を下げた。

客間に通されると、里鹿が手ずからお茶をいれてくれた。

九谷焼とおぼしき銀彩の茶碗を差し出され、勧められるがまま一口すすってみると、これがまた今までに味わったこともないほど美味しいのである。

「これは、なんという茶ですか」碗の中をためつつがめつ眺めながらたずねると、
「世にも名高き上喜撰にございます」里鹿は誇らしげに微笑んだ。

総三郎は思わず膝を打ち、

「これが例の、太平の眠りを覚ます上喜撰、たった四杯で夜も寝られず、の茶ですか」と
感心しきりであった。

ペリー提督の蒸気船を、上喜撰にかけた狂歌でその名を不朽のものにしたこのお茶は、
宇治の高級茶の銘柄なのである。この歌の大流行ですっかり品薄となっていたため、総三
郎もいつか飲んでみたいと思いつつ、いま初めて口にしてみたのだった。

「黒船が来た年、わたくしはまだ大奥にいたのです。長局が大騒ぎになったのを今でもな
つかしく思い出します。あ那时候、総三郎さんは黒船をご覧になられましたか」

「ええ。遠目からですが。木更津から横浜湊までは七里ほどですが、その真ん中ぐらいの
海域まで一隻乗り込んで来たのですよ。あれには度肝を抜かれましたなあ」

「わたくしたち、とんでもない時代に生まれてしまいましたね。ずっと太平の眠りの中
もよかったのに」

里鹿は茶碗に息を吹きかけると、ゆっくりと一口飲み込んだ。

「本日参ったのは、そのことです。我々はもう、眠りの中に居られぬ」

総三郎は丁重に茶碗を置くと、容儀をただし、里鹿の顔をじっと見据えた。そして、塗
炭の苦しみにあえぐ窮民を救うためには豪商の連合が必要な旨、これまでの経緯を含めて
朗々と述べた。

一通りの事情を聞き終えた里鹿は、少しばかり面差しが重くなったようである。

「女子のわたくしが、民のお役になど立てるのでございましょうか」

「立てますとも」総三郎は強くうなずいてみせた。

「あなたは大奥の御年寄にお仕えなされたのだから、幕臣と呼んでも差し支えないお方
です。そんなあなたに知っていたいただきたいのは、幕領の民の悲惨な現状なのです。幕閣は西
国の叛乱の対応に手いっぱい物価の高騰を抑えるすべもなく、あまつさえ軍費の不足を

補うためにさらなる臨時金の献納を各村に命じている。戦陣においては君命を待たずといいますが、事ここに至っては、我らの独断で救済に乗り出す他なしと存ずる。そのためには、あなたのご侠心とご威光が必要なのだ。暗然たる天地に少しく光のあい差すまで、どうか我らにお力をお貸し願いたい」

里鹿はしばし瞑目したが、やがて目を開けたときには、何か吹っ切れたような凜とした面差しになっていた。

「わたくしなどで、よろしければ」

里鹿はまなじりを決した。総三郎に「幕臣」と呼ばれて、長らく内に秘めていた自恃が高鳴ったのかもしれない。このとき里鹿は二十七歳。若さと熱意にあふれている。

端正な目鼻立ちの里鹿を間近にして、総三郎は女神を拝したような気がした。恋心のようなものが芽生えなかったといえは嘘になろうが、今はただ、義のために立ち上がってくれた婦人に対する感謝の念の方が強い。

帰り際、総三郎を送りに出た里鹿は、少し西日に染まりかけている空を見上げて、思い出したように言った。

「そういえば総三郎さん、ここ数年来、この辺りで鶴の密猟が行われているようなのです。わたくしも何度か鉄砲の音を聞いたことがあります」

などと、そのことについて立ち話をしていると、格子柄の羽織を着た若旦那がふらりと歩いてきた。今津朝山から婿に来たという川名正純だろうか。目だけが笑っているような青年で、人は良さそうであるが、どこか浮世離れた頼りなさを感じさせる。素足に草履をひっかけているあたり、家業に励んでいるとは思われず、今もどこかで遊んできた帰りなのかもしれない。

「ただいま」と目を合わせずに正純が傍らを通り過ぎると、里鹿も「おかえりないさませ」と、つぶやく程度にこたえた。

気まずいものを察した総三郎は、何も見ていない体で再び密猟の話題に触れた。

「下手人の心当たりはあるのですか」

「ええ。村の人たちの話ですと、小糸あたりの猟師みたいです。七右衛門という名前だそうですね」

「小糸ですか。ずいぶん奥深いところから出て来ているのですな」

「また冬になったら禁猟を犯すに違いないですから、取り締まりをお願いできないでしょうか。この辺りのお役人は、ちつとも頼りにならなくて」

と苦笑した里鹿に微笑み返した総三郎は、

「その件、島屋門におまかせください」

刀の柄を軽く拳で打って請け合った。

朝まだき。矢那川を往来する船影はまだなく、島屋の職人たちも起きていない。藍甕を洗う石段に立っているのは八刃勝壽である。浴衣の帯をほどいて禪一丁になると、片手で印を結び、気合を入れて切り下し、勝壽はゆっくりと川の水に体を浸した。

「タカマノハラニカムヅマリマスカムロギカムロミノミコトモチテ……」

神道らしい独特な諧調の韻律で禊祓詞を唱える。

高名な国学者、賀茂真淵はいう。言霊は、いふ言に即ち神の霊まして、助くるよし也。勝壽は物心ついたときからその教えを叩き込まれているから、一言一句おろそかにせず奏上するのである。

「カシコミカシコミモマヲスー」

神妙な横顔が、薄っすらと暁の薄明に染まってゆくのを見ていると、りうは神々しいものさえ感じて、思わず勝壽に向かって合掌するのだった。いつからか、勝壽の朝拝を見に来るようになっていた。

「りう、無理しなくていいよ。こんなに朝早く」

「無理してないです。わたしも、今日一日良いことがありますようにって、祈りに来てますから」

川からあがった勝壽に手拭いを手渡すのが自分の勤めであると勝手に心得ているのであ

った。

それともう一つ、誰にも言えない理由もあって、しょうじゅさんの肌を見たい、という気持ちもある。女の目から見ても勝壽の肌はきめ細かく、米糠で磨いたばかりのように艶やかなのである。水垢離の後はいっそう美しくみえるから、りうはたまらなく胸が高鳴る。

「しょうじゅさんは、水の中でどんなことを祈ってるんですか」

そう聞かれて勝壽は、うーんと唸り、手拭いで首筋を拭きながら苦笑した。

「笑われるかもしれないけれど」と前置きし、

「矢那川は、農業用水の配分をめぐって、よく水争いが起こるだろう。だからまず、この水がすべての田を潤してくれるように、と祈ってる」

「いやーん」とりうははしたないほど嘆息して、

「しょうじゅさん、立派だわあ」と体をくねらせた。

低山の連なる房総丘陵の尾根から、まぶしい朝日が差し込んで来る。二人はしばし朝焼けを振り仰いで静謐な空気を味わうのであった。

「わたしね、まだ、なをさんの死から立ち直れていないんです。しょうじゅさん、人は死んだら、どうなるんですか」

「黄泉の国へ行くよ」

「そこは、いいところなんですか」

「地下にあって、真っ暗で、穢れたところらしい」

「えっ。じゃあなをさんは、今そんなところにいるの!」

「いや、黄泉の国というものは、死そのものを表しているのだと思う」

「死、そのものって何」

「だから、その、穢れ、とか、不浄とか」

「死んだ人に対して、不浄とか、ひどくないですか」だんだんりうが怒り始めた。

勝壽も、

「輪廻転生とか、極楽浄土とかは、仏教の教えだから。神道はもっと現実に根差したものだよ」と声を荒げつつある。

「それならわたし、仏教のほうがいいかも」

「なら、こんなところに来ないで、お寺に行けばいいだろう」

この勝壽の一言で、りうの唇が震え出し、たちまち目を潤ませた。「しょうじゅさん、ひど過ぎる！」

下駄をカッカツと踏み鳴らして帰ってしまった。

「なんだよ。そんなんで神社の嫁になんかなれるもんか」

勝壽は浴衣を羽織りながら、ふてくされた様子でつぶやいた。

箱膳の前に座ると、勝秀、母敷喜と共に

「たなつ物ももの木草も天照らす日の大神のめぐみ得てこそ」と詠じてから箸をとる。

「今夜は遅くなります。島屋門の出張で小糸まで行ってまいります」

「まあ、ずいぶん遠くへ行かされるのですね」

敷喜は蒔絵漆器の蓋を取りながら、同情するように言った。

「オヤジに頼まれたんですよ」

先日、川名里鹿に頼まれた密猟取り締まりの件であった。

総三郎はこの件を、「しょーじゅに任せた」と丸投げした。

「これはおまえにしか頼めんだ。なんせ相手は得体の知れない猟師だからな。鉄砲を持っているわけだし、よほど警戒してかからんと。いざとなれば防戦できるだけの腕利きでないと務まらないが、なにせミチタは家に籠って出て来ないし、すぐに動ける手練れはおまえだけなのだ」

「オヤジが請け合っただから、オヤジが行くのが筋でしょう」

「わしは今、ほんに忙しいのだ。しかも、鶴を撃つ猟師にかかわるなんぞ縁起でもないだ

ろう。わしの女房の名が、鶴だけに」

などと言って、勝壽に押し付けたのだった。

小糸(現、君津市)は房総丘陵の懐深く、海からはよほど離れたところである。密猟をしている男はそこからさらに奥まった谷間の部落に住んでいるという。人の往来もほとんどなく、草鞋が小石や枯れ枝を踏む音と、時おり鳴く雉の声ぐらしか目立った音も聞こえてこない。ほんとうにこんなところに人が住んでいるのだろうかと不安になりかけた頃、獣肉を煮るようなにおいがしてきて、へししみせと書かれた幟が見えてきた。行商人が足を休めるための茶屋だろうか。粗末な葦簀張りの店だったが、喉も乾いているし、勝壽は道中差しを置いて縁台に腰を下ろした。

尚古趣味の勝壽は、普段から狩衣や直垂を着ており、この時も古製の直垂姿だったから、茶屋の店主とおぼしき老人はあからさまに怪訝な顔をした。

「怪しい者じゃないですよ。かねっこおりを一杯ください」

木更津の水売りであれば冷たい白玉が入っているが、ここのはただの井戸水だった。けれども、実によく冷えていて美味かった。

「この辺りに、七右衛門という猟師が住んでいませんか」

そう老人に尋ねると、

「七右衛門だら、この店に鹿や猪の肉卸しとるよ。それにしても、なんでまだ、ああた男に用がある」

と不思議そうに顔をしかめた。

「あ、いや、おれは木更津の島屋に用事を頼まれて来ただけだね」

「この先の、大谷村の奥に住んどる。まあ、無頓着な、むさぐるしい男さ」

そのうち山間の遠くで鉄砲の音が響いた。

「噂すれば何どやら、だ。あの音たどっていぐどいい。ふてぶでしい野郎だが、ひなうちの腕だけは日ノ本一だ」

「ひなうち」とは、この地方のことばで火縄銃のことである。

茶屋の老人が指差す方向へ勝壽は歩き出した。山林の下草を踏み分けて進むと、ほどなく、汚いつづれを着て、股引に脚絆を着けた男が膝を台にして銃を構えている姿が見えてきた。巨漢だった。月代など剃ったこともないという体の総髪であり、横顔の薄汚さは垢なのか、それとも火薬の煤だろうか。

銃口が向けられている先に目を凝らしてみると、十五間以上も離れたブナの樹の枝に一羽の雉がとまっている。もしあれを狙っているのならたいしたものだと思った瞬間、パーンと耳をつんざく音が響いて、雉がぱりと落ちた。男の傍らに伏せていた犬がいっさんに駆けて行った。

「すごい」勝壽は感嘆した。

その小さなつぶやきを聞き洩らさなかったあたり、この猟師の五感は研ぎ澄まされている。

「誰だおめえは。そこであにしとるだ」

砲術は武芸十八般の一つである。たとえ山間の怪しげな猟師でも、一芸に秀でた者に対する尊敬の念が勝壽の胸に湧き上がってくるのだった。そんな思いもあって、まずは丁寧に頭を下げた。

「島屋道場師範、八劔八幡神社の勝壽と申す。あなた、七右衛門さんだよ。誠にあいすまぬが、横田での鶴の猟が御法度ということで、捕えにきました」

それを聞いて男は慌てて逃げ出そうとしたが、なにせ巨漢過ぎて足が遅く、両腕を振り回して抵抗したが、すぐに勝壽に組み伏せられてしまった。

が、ものすごく臭く、忠義の猟犬が必死に吠え立ててもいたから、勝壽はすぐに男を開放した。

男は地べたに座り込んだまま、開き直ったように大声を上げた。

「だって仕方ねえべよ。鶴の肉はな、女の血の道の病気に特效があるっていうんで、高く売れんだよ。ありゃあ大事な収入源なんだ。見逃してくれ、な、頼む」と仰々しく両手を

合わせたりする。

「いや、おれは代理で来ただけだから。見逃す見逃さないは上の先生が決めることなんで
」
と断りつつ、捕縄を取り出した。

「おれが鶴を獲るのは貧しいからだ。こんな谷間のどん詰まりに生まれちゃって、田んぼもなけりゃ、まともな商売もありやしねえ。おれにだって女房もガキもいるんだからな。生きてくためにゃあ、なんでもやらなきゃなんねえべよ。だいたいなんだって、世の中こんな不公平なんだ。おまえ神社の息子だろ、答えてみる。神様はなんだってこんなに理不尽なんだ。そもそも神って何者だ」

突然投げかけられた高尚な質問に、勝壽は戸惑った。しばし唸って思案にくれたもの、
、ともかく自分なりに答えねばなるまいと思う。

「西行の歌にあるでしょう。なにごとのおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる、って。神とは、そのようなものです」

「なんだそれ！」男は勝壽の顔をのぞき込んで、「それが神におまんま食わせてもらってるやつの答えか。聞いてあきれら」そっくり返って笑い出した。「勝手に泣いてる」

今朝のりうのことといい、はたまたここでも見も知らぬ男にけなされて、勝壽は頭のどこかでブチッと何かが切れる音が聞こえた気がした。

「おい、あんた、おれにしょつ引かれたくなかったら、ひなうちの撃ち方を教えろ」と怒鳴って男の鉄砲を奪い取った。

「さあ、七右衛門先生、教えるんだ」

おかしな展開になったと困惑しつつも、七右衛門は胴乱から火薬の入った実包を取り出して、勝壽に渡した。

「これを、その中に入れるんだ」

と銃口を指差した。

勝壽は言われた通りに銃身を立てて上薬を入れると、六匁の鉛弾を先込めした。これを

カルカという棒で突き、今度は銃身を水平に持ち直し、横に露出した火皿に口薬を入れて火蓋を閉じる。七右衛門が火縄を装着させると、勝壽は火蓋を切って、銃身手前の照星に目線を合わせた。何を狙っているのでもないが、しっかりと銃床を頼付けして、静かに金を引く。

パンという音とともに強い衝撃が伝わり、白煙が顔のまわりをおおった。

勝壽の撃った弾は、ブナの枝葉を一瞬で吹き飛ばしてしまった。

なんとも言えない爽快感だった。勝壽は乾いた硝煙を吸い込んで、このにおい、嫌いやないと思った。